

『讃岐典侍日記』の主題

林水福

『讃岐典侍日記』の主題について考察した論文は、現在のところ二つしか見られない。一つは佐山済氏の「讃岐典侍日記の主題性」(『国語文化』、昭和17・1)であり、今一つは、増田繁夫氏の「讃岐典侍日記の主題——『忠誠』といふ人間関係——」(『大阪市立大学人文研究』、昭和60・12)である。前者は、石原昭平氏が言うように「抽象論めいた文化評論的」なもので、「この日記に対する初めての評論的なもの」という歴史的意義はあるかもしれないが、分かりにくい論文と言えるであろう。後者は、「忠誠」という観点から論じ、「作者の忠誠は男女関係を第一次的な契機とするものであったとしても、その男女関係に忠誠といふ態度をもちこんだことは、この時代にあつてはやはり新しいあり方であつたと思ふ」と結論しているが、これは確かに本日記の一つの新しい読みの可能性を示唆しているとも言える。特に上巻に限って言えば、作者の堀河天皇に対する「忠誠」心は少なからず読み取ることができよう。しかしながら、作者が本日記で書きたかった主題は、果して「忠誠」心であるかは甚だ疑問と言わざるを得ない。以上の二点の主題論に比べて、今井源衛氏の「二人

の関係をはっきりと、男女のつながりのあつたものとして捉えることが、この作品の理解に大切ではないかと思う」という指摘のほうが、はるかに本日記の作品論に大きな影響を与えていると言えよう。この指摘以来、日記の作者と堀河天皇の間には男女関係があつたということがほぼ定説となり、作品論もそれを軸に展開して行くことになる。そのような賛成論の中で、異議は全然ないでもない。真正面からは否定されていないが、論旨から見れば、否定の立場に立つと思われる論文も散見される。私も少数派の否定論の一人であり、これまで発表したいくつかの論文の中でそれについてふれたことがある。(注3)この問題は、新たな史料があらわれなければ、永遠に並行線のままであろう。しかし、ここで探るべきは、二人のスクランダルではない。男女関係の有無より恋愛関係が真に成立していたか否かの方が文芸作品の研究にとつてはより意義が大きいのではないか、と思われる。なぜならば、帝と「偶然」に男女関係が出来ることは、平安時代においては珍しいものではなかったからである、当時の天皇がすべて恋愛感情のもとでのみ女性と同衾したと考えるのは滑稽なことであるとさ

え言えるのではないか。そもそも平安朝女流日記は作者の人生体験に基づいて書かれたものとは言え、歴史物語と同質のものではない。虚構を前提とする物語とはなおさら異なる。しかし、日記「文芸」である以上、全くの虚構とは言えないが、その中に虚構の要素が織り込まれているも否定できないのである。どれが事実か、どれが虚構かということは史料に照らし合わせれば、ある程度解明できるのかもしれないが、「日記」を「作品化」した以上事実素材は、さほど重要な意味を持っていないと思われる。以下、作品世界を中心に見据えて本日記の主題を解明して行こうと思う。

1 序と末尾の章段の意味

平安朝女流日記は冒頭で日記執筆の動機や目的・意図などを語っているものが多いが、本日記も例外ではない。次に引用するのは、序にあたる部分の後半である。

思ひいづれば、わが君につかうまつること、春の花・秋のもみぢを見ても、月のくもらぬ空をながめ、雪のあした御ともにもさぶらひて、もろともに、八年の春秋つかうまつりしほど、常はめでたき御こと多く、あしたの御おこなひ・ゆふべの御笛のね忘れがたさに、なぐさむや、と思ひいづることども書きつづくれば、筆のたちども見えきりふたがりて、すずりの水に涙落ちそひて、水くきのあとも流れあふこちしで、涙ぞいとどまざるやうに、書きなどせんにまぎれなどやすると書きたることなれど、姨捨山になぐさめかねられて、

たへがたくぞ。(三七二ページ)

ここでは亡き堀河天皇への追慕のために、日記を執筆したが、その結果、慰まず、かえって悲しみて胸がいっぱいである、という旨を語っている。しかし、右の引用に続く上巻の堀河天皇の発病から崩御に至るまでの記述の中には、序にある「春の花・秋のもみぢを見ても、月のくもらぬ空をながめ、雪のあした御ともにもさぶらひて」というような情景は見られないし、「あしたの御おこなひ・ゆふべの御笛のね」を具体的に記す部分は存在しない。それゆえ、本日記の序は下巻のみの序で、全体の序ではないという意見も出されるほどだが、執筆時期と成立過程は別として、作者が最終的にこの序を日記の冒頭に据えたのは、それなりの理由と意図があったに違いない。私見では、上下巻の間に様々な相違があるにもかかわらず、作者は、序と末尾の章段によって本日記を一つのまとまった作品として世に送り出したかったのである。換言すれば、序と終りの章段で上下巻を何とか接合しようとしたのである。

「書きなどせんにまぎれなどやすると書きたることなれど、姨捨山になぐさめかねられて」という叙述等からこの序の部分は、やはり他の部分が出来てから書かれたものだと思われる。現日記の配列順序は、執筆の順序ではないことは明白である。この序から、作者は失った堀河天皇との日々の思い出を書くという行為を通して、自分と堀河天皇との恋を再確認し、現在の「生」を獲得しようとしていたことが読み取れる。

しかし、下巻の末尾の章段とを併せ読めば、作者の魂の不安と

搖ぎが強く感じられるであろう。

うち見ん人、「女房の身にて、あまりものしり顔に、にくし」などぞ、そしりあはんずらん。かやうの法問のみちなどさへ、朝夕のよしなし物語に、常におほせられ聞かせたまひしかば、ことの有様、思ひいでらるるまに、書きたるなり。もどくべからず。しのびまゐらせざらん人は、何とかは見ん。われは、ただひと所の御心の、ありがたくなつかしう、女房主などこそかくはおはしまさめと、おぼえたまひしか、わすらるる世なくおぼゆるまに、書きつけられて。

なげきつつ年の暮れなばなき人のわかれやいとど遠くなりなん（四五四ページ）

これほどまでに読者の諒解を得ようとする表現は、同時代の他の女流日記には見られないものであろう。「ことの有様、思ひいでらるるまに、書きたるなり。」「わすらるる世なくおぼゆるまに、書きつけられて。」等、繰り返し弁明しているのだが、もし、日記に書かれていることが、典侍の身分相応のものであれば、再三弁明する必要はなからう。さらに「思ひやれなぐさむやとて書きおきしことはさへぞ見ればかなしき」という表現からも、読者に諒解を乞う気持ちが見取れる。また、「あひ思ひたらん人も、かたうどなどなからん人は、はえなきこちすれば」という「みかど」の設定は、言うまでもなく、読者からの誹謗を防ぐためである。（注4）もし本日記の主題が、増田氏の言うような「忠誠」であるな

らば、作者が読者からの非難を予想し、諒解を得ようとする筆致は決してとらないであろう。「忠誠」という精神は、時間・空間を越えて概して高く評価されるものである。もし作者が本日記で忠誠を主題としたのなら、「かなし」や「姨捨山になぐさめかねられて、たへがたくぞ」といった悲哀は出て来なかつたはずである。

2 堀河天皇臨終の際の描写

堀河天皇は嘉承二年（一一〇七）七月十九日に、短かい生涯を閉じた。白河院が実権を握っていたとは言え、天皇の崩御により宮廷の人々は慌しい動きを見せる。その様子は、『殿暦』や『中右記』等に詳細に記載されている。本日記の作者は、六月二十日の天皇の発病以来、ずっと附き添って看護していた三人の女房のうちの一人であり、天皇崩御の際の周りの人々の動静は、当然目に入っていたはずだ。しかし、彼女の捉え方は、史料とは異なり主観的に乳母たちの反応を記す。

まず、大式三位の反応を見てみよう。

大式の三位、おほとのごもりたるやうなる人を、わが君や、いかにしてかたがたをば捨ておはしましぬるぞ。うまれさせたまひしより、かた時はなれまゐらせず、あやしのきぬのなかりおほしまゐらせて、いづれの行幸にもはなれず、しりにたちさきにたち、やまひの心ならぬ里居十日ばかりするに、こひしくゆかしく思ひまゐらせつるに、かた時見まゐらせで、いかでかさぶらはん。ただ、見しておはしましね。い

まひとたび、おどろかせたまひて、見えさせたまへ。あな、かなしや。こひしさを、いかにしてさぶらはん。ただめしてぞ。(三九九ページ)

大式三位は、『中右記』には帥三位と記されている。日記に登場する播磨守と出雲守の二人は、大式三位の子で、実名は藤原基隆と家保である。『大府記』承暦二年(一〇七八)七月九日の条に、「中宮御産皇子(堀河)降誕(中略)計家範妻女參御乳母」と記されている。この家範は、大式三位の夫である。『太府記』のこの記録によれば、大式三位は堀河天皇の誕生と同時に乳母になったのであるから先に引用した大式三位の嘆き言葉はもっともである。そしてまた、次に引用する場面から読み取れるのは、堀河天皇の優しさの他に、大式三位と堀河天皇との並々ならぬ感情のつながりであろう。堀河天皇の誕生の時からずっと面倒を見た人でなければ、次のような非礼はできない。

大式の三位、なげしのもとにさぶらひたまふを、見つかはして、「おのれは、ゆゆしくたゆみものかな。われは、けふあす死なんずるは、知らぬか」とおほせらるれば、「いかでたゆみさぶらはんずるぞ。たゆみさぶらはねど、力のおよびさぶらはばこそ」と申さるれば、「何か。今たゆみたるぞ。今こころみん」とおほせられて、(三七七ページ)

さて、もう一人の乳母、作者の実姉と言われる藤三位はどうであつたか。

御障子よりなげいれらるるものを、何ぞと見ればわがつばねに置きたる二藍の唐衣かづきたるものなげいれて、人のゐ

るを見れば、藤三位殿のかくと聞きて参りたまへるなりけり。「あな、心うや。例さまに目見あげたまひつらんを、いまひとたび見まゐらせずなりぬる、心うさを、何のもののいみをしてよびたまはざりつるぞ。年ごろの御やまひをだに、はづることなくあつかひまゐらせて、かぎりのたびしも、かくこちを病みてける身の宿世の、心うきこと」といひつづけて、泣きたまふ。(四〇〇ページ)

藤三位は作者とは年の離れた姉のようだ。堀河天皇が六月二十日に発病した時、藤三位は「ぬるみこちわづらひて」堀河天皇を看護する列に加わることができなかったが、『天祚礼祀職掌録』には、「堀河院、応徳三年十二月十九日即位……褰帳、左居子女式部卿敦實親王女右從五位上藤原兼子頭綱女」と記され、堀河天皇の即位の儀には褰帳役で参仕していたことが知られる。藤三位は応徳三年(一〇八六)から嘉承二年(一一〇七)までの二年間堀河天皇の乳母とつとめていたため、当然深い感情のつながりがあると考えられる。一方、作者藤原長子は、『中右記』康和四年(一一〇二)正月一日の記事に「陪膳新興侍藤原長子頭綱女也夜前任典侍」とあるので、堀河天皇崩御の嘉承二年(一一〇七)まで、足かけ六年仕えたことになる。勿論、人間の感情の発展は、単純に時間ではかられないものもあるが、しかし、単に公の職掌から言えば、作者と堀河天皇との間の感情は、普通に考えれば到底大式三位と藤三位に及ばない。

上巻には、作者が堀河天皇に対して深い尊敬の念を抱く表現が見られる。先に引用した大式三位と堀河天皇とのやりとりの続き

の部分で、作者は次のように語っている。

ただ、われ、乳母などのやうにそひふしまゐらせて、泣く。
あな、い・み・じ、か・く・てはかなくなれたまひなんゆゆしさこ
そ、あ・り・が・た・く・つ・か・う・ま・つ・り・よ・か・り・つ・る・御心のめでたさ、な
ど思ひつづけられて、目も心になかふものなりければ、つゆ
もねられず、まもりまゐらせて、ほどさへたへがたく暑きこ
ろにて、御障子とふさせたまへるとにつめられて、寄りそひ
まゐらせて、ねいらせたまへる御顔をまもらへまゐらせて、
泣くよりほかのことぞなき。(圈点は引用者。三七七ページ)
特に、私に付した圈点の箇所に注目すべきだと思う。「御心の
めでたさ」は具体的に何を指すかは、決め難いが、堀河天皇の思
い遣りのある優しい性格を指すと考えれば大過はなからう。堀河
天皇の優しさと言えは重病にもかかわらず、関白殿の参上を、附
添の女房たちに告げる場面がすぐに想起されよう。

「大臣く」と、いみじう苦しげにおぼしめしながらつげさ
せたまふ、御心のありがたさは、いかでか思ひしられざらん。
かく、苦しげなる御ここに、たゆまずつげさせたまふ御心
の、あはれに思ひしられて、涙うくをあやしげに御覽じて、
はかばかしくもめさで、ふさせたまひぬれば、またそひふし
まゐらせぬ。(圈点は引用者。三八一ページ)

堀河天皇の思い遣りがある振舞いを、作者は「御心のありがた
さ」として受け止め、「あはれ」に感じる。

上巻における作者の堀河天皇に対する心情は、微妙に変化する。

嘉承二年六月二十日の発病直後は、天皇に尊敬と感謝の念を抱き、
献身的に看護するが、徐々に天皇と一体化しようとする心情が強
くなって行くようだ。作者のそのような心情の一端は次の場面か
ら垣間見ることができると思われる。

僧正めし、十二人の久住者めしよせへ、おほかたものも聞
こえずなりにたり。(中略)ともすれば、「太神宮、助けさ
せたまへ」と申させたまへど、そのしるしなく、むげに御目
などかはりゆく。僧正、とみに参らせたまはず、ややひさし
くありて参らせたまへれば、日ごろへだつれど、何の、もの
のおぼえんにか、もののはづかしとおおぼえん、ただひとつ
にまとはれて、僧正・三位殿ふたり・おまへ・わが身、五人
の人々、ひとつにまとはれあひたり。(三九六ページ)

「何の、もののおおぼえんにか、もののはづかしとおおぼえん」
という言葉裏から取れば、普段は、堀河天皇に身を寄せるなど
ということとはできない、ということにならう。作者のこのような
表現は、正に初恋の相手に始めて心情を吐露する少女の口ぶりで
ある。上巻に見られる作者と堀河天皇との数少ない対話(厳密に
言えば、対話とは言えず、天皇への返事というのが正確であるが)
からは、作者が公の身分を厳しく守っていたことが知られるので
はなからうか。本当に作者が寵愛されていたとすれば、「御膝の
陰」にはさ程感動しなかったであろうし、堀河天皇に対して推量
表現が多い(注6)のも、やはり直接対話できなかったからでは
ないか。

堀河天皇が崩御するまでの上巻においては、先に述べたように、

作者の天皇に対する尊敬の表現が随所見られるし、危篤の場面には堀河天皇と一体化しようとする心もほの見えるとは言え、作者と堀河天皇との心の交流の描写は、殆どないと言えよう、こうした状況の下で、堀河天皇崩御の際の大式三位と藤三位の泣き狂う情景を目にした作者は次のように書き記す。

われは、御あせをのごひまゐらせつる陸奥紙を顔におしあててぞ、そひゐられたる。あの人たちの思ひまゐらせらるらんにもおとらず、思ひまゐらすと、年ごろは思ひつれど、なほおとりけるにや、あれらのやうに声たてられぬは、とぞ思ひしらるる。(四〇〇ページ)

この文章について、今井源衛氏は次のように解釈している。

「なほ劣りけるにや」という表現にまどわされてはならないだろう。一見自身の愛の不足を反省しているように見せてはいるが、むしろ、騒がしく「あれらのやうに声立て」る者たちに対する絶対的な優越の自信が、彼女の胸の底には潜んでいるのではないだろうか。院と自身とを結びつけるものは彼女の全身的な愛であったし、今ここに、彼女が額に押し当てている陸奥紙は、院の最期の汗をしとどこに吸い、それはこの上もない二人の愛の証であったろう。

解釈自体は優れたものだと思わざるを得ないが、作者の筆調から考えれば、この一段の文章を「反語的」に捉えるよりも素直に真正面から解釈したほうが、作者の真情に迫ることができるのではないかと思う。上巻の作者は、「優越」感を持っていないばかりか、むしろ劣等感を持っていると言ったほうがふさわしい。(注7)

現実の世界においては、作者の仕えた期間は、大式三位と藤三位の二人に比べれば短く、天皇に対しての感情も遠く及ばない。

作者のこのような「反省めいた」心情のあらわれは、下巻の執筆——堀河天皇との一体化、換言すれば堀河天皇との恋を達成する——を促したエネルギーとなるのである。勿論、その最大の契機は、堀河天皇の死である。死の場面で作者が反省したりすることによって天皇への愛が深まっていくのである。そのような意味で、作者の愛は堀河天皇の崩御によって初めて達成できる性質の愛であったと言えるのではなからうか。

3 再出仕——主題形成の過程

作者が鳥羽新帝への再出仕を巡る記述にさいたスペースは、下巻五十ページのうち十一ページ(小学館古典文学全集本による)である。作者はなぜ、懸命に再出仕の過程を描いたのか。そして、作者の再出仕に際しての心情はいかなるものであったか。さらには、再出仕は、作者の堀河天皇との恋の世界を達成させるにあたって、どのような役割を果たしているかなども探る必要がある。

下巻は、次のように書き出される。

かくいふほどに、十月になりぬ。「弁の三位殿より、御ふみ」といへば、取りいれて見れば、「年ごろ、宮づかへせさせたまふ御心のありがたさなど、よく聞きおかせたまひたりしかばにや、院よりこそ、『このうちにさやうなる人のたいせちなり。登時参るべきよし、おほせごとあれば、さるここ

ちせさせたまへ」とある、見るにぞ、あさましく、ひがめかと思ふまで、あきれられける。おはしまししをりよりかくは聞こえしかど、いかにも御いらへのなかりしには、さらでもとおぼしめすにや、それをいつしかといひ顔に参らんこと、

あさましき。(四〇七ページ)

白河院から、鳥羽新帝への再出仕の命令を受けた作者が最初に持った感情は、「あさまし」であつた。「見るにぞ、あさましく」の「あさまし」は、驚くの意味で、引用文の終りにある「あさましき」は、あきれることと解釈してよからう。しかし、驚くにしろ、あきれるにしろ、作者は鳥羽新帝へ再出仕することに関して堅く拒否する態度は見せていないばかりか、読者に再出仕の必然性を暗示しているかのようでもある。「さらでもとおぼしめすにや、それをいつしかといひ顔に参らんこと」と世間の規準に従うふうを見せながら、背後では、「再出仕してもいいが、時期としては、ちょっとはやりすぎです」という声が響いているようだ。作者は先に引用した文章の続きに、周防内待が後冷泉院の崩御後、後三条院から七月七日参内せよ、と命令された時に詠んだ歌を引いている。

天の川おなじ流れと聞きながらわたらんことはなほぞかな

しき(四〇八ページ)

このように、周防内待は後三条院への再出仕について「かなし」と詠んでいるが、これは「わたらんこと」が前提となっていて、強い拒否の態度とは言えない。作者は自己の心情に關してもこの歌によって代弁させていると思われ、「げにおとぼゆれ」という

作者の感想は、自己も再出仕する結果になることを予告していると言えよう。

「故院の御かたみにはゆかしく思ひまゐらすれど、さしいでんこと、なほあるべきことならず。(四〇八ページ)

ここでも、作者は繰り返しまだ再出仕の時期ではないことを表明している。親や姉の藤三位などの思惑を感じし、髪を切つて尼になろうとも思うが、「うとましの心」と批判されるかもしれないなどという思いをめぐらすのである。ここまで挙げた作者の思慮等は、作者の「私」的な立場から発したものである。作者が挙げた「公」的な理由の一つは、

「御めのとたち、まだ六位にて、五位にならぬかぎりは、もの参らせぬことなり。この二十三日、六日、八日ぞよき日。とく、とく」とあるふみ、たびたび見ゆれど、思ひたつべきここちもせず。(四〇九ページ)

というのであるが、史実では、その時、弁典侍藤原悦子は既に従五位下で、大納言の典侍藤原実子はこの時初めて従五位下に叙された。この部分は事実とは異なっているようだ。

今一つ「公」の理由について、作者は次のように語っている。

かやうにてのみ明けくるるに、かく里に心のどかなることかたく、五六日になれば、内侍のもとより、人なし、参れ、といふふみのこし、など思ひつづけられて、過ぐすほどに、御即位など、よにののしりあひたり。

「『大納言のめのと、とばりあげしたまふべし』とて、安芸の前司の、『三位殿こそ、故院の御時とばりあげはせさせ

たまひければ、その例をまねばん」など、たづねらるる」と聞くほどに、「大納言、日ごろ例ならで、にはかに重りて、うせたまひて」と聞こゆ。いと心うき世かなと、思ひかこちぬ。

夕ぐれに、三位殿のもとより、とばりあげすべきよしあれは、いとあさましくて、(四一〇ページ)

大納言実卿の死は、『中右記』嘉承二年(一一〇七)十一月十四日の条によれば、「今夜及深更、入道大納言公実卿薨云々、所悩及数年、何為哉、但不見君即位、誠足遺恨耳」となっている。これによれば十一月十四日に死去したことが明らかであるが、日記では、十月のこととして記されている。時間的に齟齬が生じているのは、作者の記憶違いによったものとは考えられない。ここであえて作者が虚構を用いたのは恐らく次のような理由からであろう。すなわち、作者は堀河天皇と深い関係があり、本来、鳥羽新帝に再出仕する意思は全くないが、周りの人たちへの配慮のみならず、公的にも要請があったのでやむを得ずに再出仕しなければならなかったということを読者に弁明したかったのであろう。

作者の再出仕への自己弁明は、さらに続く。

「いかがせさせたまはん。世のなか、わづらはしくさぶらふめり。ただ、とくおぼしめしたつべきなめり。参らじとさぶらはば、わがためにこそ、よしなきこと、いでまうでこめ。わが君、さるべきとおぼしめさせたまふべきに」など、さたしあひたるほどに、「内蔵の頭の殿より人参らせたり。院宣にて、摂政殿のうけたまはりにてさぶらふ。『堀河院の御素服、たまはりたらば、とくぬぐべきなり』と宣旨くだりぬ。

とくぬがせたまへ」といひにおこせたり。(四一一ページ)

出仕しなければ、ひどい目に遭わせられるかもしれない、という言外の意を持たせ、自己の再出仕は避け難いことであることを印象付けようとしているようだ。なお、白河院からの再三にわたる再出仕の要請は、自己の存在が宮中においていかに大きいことかということも表示していよう。作者は迷ったあげく「せうとなる人」に意見を聞く。その返答は、やはり再出仕すべきだということと、白河院に特に重視されるのは光栄なことである、という主旨であった。このように、周りの人に対する配慮等は、実は作者の再出仕への苦悩・不安というよりも、自分の存在がいかに大きいかと、読者に誇示するための描写となっているような印象を受ける。

下巻の再出仕を巡る敘述は、上巻の堀河天皇を中心とした敘述を想起させるが、しかし、主人公はここでは天皇から作者に変わっている。現実問題としては、一介の典侍がそれほど重視されたとは考え難い。これは、作者の文学的営為によってなされた虚構の世界での出来事に違いない。具体的に言えば、作者は上巻において、自分と堀河天皇との二人だけの世界を構築しようとしたが、天皇の崩御によって一旦は不可能となる。しかし、再出仕によって自分と堀河天皇との恋の世界を構築するのに必要な舞台は出来上がる、再出仕について長い文章で記した理由は、堀河天皇への「忠誠」心による再出仕拒否の心情ではなく、自分の重要性及び再出仕の不可避性を読者に諒解して欲しかったためではなからうか。

4 主題の完成

堀河天皇と作者との二人だけの世界を構築するためには、作者の位相を天皇と同程度まで高めなければならなかった。それゆえ、上巻の、上臈の命令に柔順に従って行動する献身的な作者像は、下巻になると一転して作者が周りの人たちの羨望する対象になったり、堀河院をはじめ、局の女房たちに大事にされる対象となった。 (注8) 現実の世界では、作者と堀河天皇との世界の完成は、堀河天皇の死、すなわち対象の喪失によって不可能なこととなった。しかし、日記、すなわち虚構の世界では、作者は巧みに回想を駆使して、自分と堀河天皇との世界を完成したのである。嘉承二年(一一〇七)元旦の夕方に、鳥羽新帝に参上した作者は、翌日の朝起きて、次のように心情を語る。

つとめて、起きて見れば、べちにたがひたることなきこちとして、おはしますらん有様、ことごとし思ひなされてゐたるほどに、「降れ、降れ、こ雪」と、いはけなき御けはひにておほせらるる、聞こゆる。こはたそ、たが子にか、と思ふほどに、まことにさぞかし。思ふに、あさましう、これを主とちたのみまゐらせてさぶらはんずるか、たのもしげなきぞ、あはれなる。(四一八ページ)

幼い鳥羽新帝を見て、「たのもしげなきぞ、あはれなる」と嘆くのは、もっともなことだと思う。「おまへを見れば、べちにたがひたることなきこちして」とあるように、目前の様子は、堀

河天皇の生前とは変わらないが、最も大事な主が堀河天皇から鳥羽新帝に変わったのである。作者は、このような断片的回想によって読者に自己と故堀河天皇との間に、密接な関係があったことを暗示しようとしているようだ。

その日の夕方、長子は初めて鳥羽新帝にお食事を差し上げる、「こち」とあれば、すべりいでて参らする、昔にたがはず。御台のいと黒らかなる、御器なくてかはらけにてあるぞ、見ならぬこちする。走りおはしまして、顔のもとにさし寄りて、「たれぞ、こは」とおほせらるれば、人々、「堀河院の御乳母子ぞかし」と申せば、まこととおぼしたり。このほかに、見まゐらせしほどよりは、おとなしくならせたまひにける、と見る。(圏点は引用者。四一九ページ)

現在の目の光景から、昔を回想して、そして現在と過去とを比較するパターンをとっている。しかし、こういった断片の回想の中で、作者は「傍観者」としての位置におかれている。例えば、先の引用の続きは次のようになっている。

をととしのことぞかし、参らせたまひて、弘徽殿におはしまいに、この御かたにわたらせたまひしかば、しばしばかりありて、「今は、さは、帰らせたまひね。日の暮れぬさきに、かしらけづらん」とそそのかしまゐらせたまひしかば、「いましばし、さぶらはばや」とおほせられたりしを、いみじうをかしげに思ひまゐらせたまへりしなど、ただ今のこちして、かきくらすこちす。(四一九ページ)

右は完全に「褻」の場面であるので、作者と当事者以外は、お

そらく誰もそれが事実であることを証明できなければ、否定もできないであろう。作者はこの中では「傍観者」の位置にあり、堀河天皇との直接的な結び付きは見られない。

しかし、正月三日、作者が鳥羽新帝にお食事を差し上げる時にちょうど摂政忠実が参内する。そこで、いわゆる「お膝のかげ」のエピソードが摂政忠実の口から語られる。

「思ひかけざりしことかな。かやうに近やかに参りて、ものなど申ししことは、思はざりしかな。例ならでおはしましをりなど、御かたはらにそひふさせたまへりしをりに参りたりしかば、御ひざ高くなさせたまひて、かげにかくさせたまひしをり、かやうならんことどもこそ思はざりしか。

げにかげにもかくれさせたまひしかな。世はかくもありけるかな」(四二一ページ)

右の場面では、作者と堀河天皇との結び付きが色濃く表現されている。これは断片的な回想からまとまった回想へと一歩近付いた場面であろう。先述した現実と過去とが二重の映像として連想されるといふことから次第に離れて来るのである。

嘉承三年(一一〇八)六月の記事にある前年の泉見物と扇引きとの回想の中では、作者は既に傍観者ではなく当事者になっている。そして、作者が堀河天皇にどんなに寵愛されていたかが、第三者の口を通して語られる、という新たな局面があらわれる。扇引きの回想は次のようである。

つとめて、明るくやおそきとはじめさせたまひて、人たちめしすゑて、大貳の三位殿をはじめてゐあはれたりしに、「ま

づ、ひけ」とおほせられしかば、ひきしに、うつくしと見しをえひきあてで、なかにわろかりしをひきあてたりしを、うへに投げおきしかば、「かかるやうやある」とて、笑はせたまひたりしことを、但馬殿といふ人の、「家の子の心なるや。こと人はえせじ」など、興じあはれしに、そのをりは何ともおぼえざりしことさへ、いかでさはしまゐらせけるにかと、なめげに、けふは、ありがたうおぼゆる。(四二九ページ)

しかしここでは作者と堀河天皇との二人だけの世界は完成されているとは言えない。それは天仁元年(一一〇八)五節の時に、嘉承元年(一一〇六)の五節のことを回想する場面まで待たなければならぬ。

雪の降りたるつとめて、まだおほとのごもりたりしに、雪高く降りたるよし申すを聞こしめして、その夜、御かたはらにさぶらひしかば、もろともに具しまゐらせて、見しつとめてぞかし、いつも雪をめでたしと思ふなかに、ことにめでたかりしかば、あやしのしづがやだに、それにつけて見所こそはあるに、まいて、玉・鏡とみがかれたるもしきのうちに、もろともに御覽せし有様など、絵かく身ならましかば、つゆたがへずかきて、人にも見せまほしかりしかど、おしあげさせたまへりしかば、まことに、降りつもりたりしさま、こずゑあらん所は、いづれを梅とわきがたげなりし。仁寿殿のまへなる竹の台、をれぬと見ゆるまでたわみたり。おまへの火たき屋も、うづもれたるさまして、今もかきくらし降るさま、こちたげなり。滝口の本所のまへの透垣などに降りお

きたる、見所あるこちして、をりからなればにや、ござんのたちしは、せめてのわが心の見なしにや、かかやかしきまでに見るに、わがねくたれの姿、まばゆくおぼえしかば、「常よりみめほしきつとめてかな」と申したりし、をかしげにおぼしめして、「いつもさぞ見ゆる」とおほせられて、ほほゑませたまひたりし御口つき、向かひまるらせたるこちするに、五節のをり着たりし、黄なるより紅までにはひたりし紅葉どもに、葡萄染の唐衣とかや着たりし、わが着たるものの色あひ、雪のほひにけざげとこそめでたきに、とみにもえ参らせたまはで、御覽ぜしに、滝口の本所の雑仕なめり、女の声にて、透垣のもと近くさしいでて、見るけはひして、「あな、ゆゆしの雪の高さや。いかがせんずる。すそもえ取りゆくまじきはとよ」といひしを聞かせたまひて、「これ聞け。いみじき大事いできにたりとこそ、思ひあつかひたれ。雪のめでたさ、御目、さめぬるこちする」とて、笑はせたまひしなど、思ひいでられて、つくづくと思ひむすばほるも、(四四四ページ)

この回想の中の作者は、完全に当事者であり、しかもその世界は第三者の介入が許さない堀河天皇との二人だけの世界である。堀河天皇に寵愛されたことを、第一人称で語る点が前の回想とは違っている。作者が本日記に真に書きたかったのは、自己と堀河天皇との世界である、換言すれば、本日記の主題は作者と堀河天皇との愛である。

作者が堀河天皇に特に寵愛された様子は、もう一つの回想——押し出をする——にも具体的に描かれている。ここに描かれた場面は、二人だけの世界ではないが、作者と堀河天皇との生々しい会話で構築した点は、やはり断片的な回想には見られないものである。これに続く里さがりの際の思い出は、また、完全に作者と堀河天皇との二人だけの世界である。この二つの回想と五節の雪の朝の回想が同じ日の出来事として描かれているのは、これら三つの回想をもって自分と堀河天皇との世界を完成させたかったためであろう。

作者が堀河天皇との愛の世界を作品世界の中で一旦達成せしめてからは、それ以上回想する必要がなく、それゆえ五節の記事以後は、まとまった回想は出て来ないし、断片的な回想も見られない。本当に事実に基づいて書かれたものならば、このような現象は生じまい。

5 結語

作者が自己の体験、あるいは見聞した事実に基づいて人生のある時点で統一した主題によって回想して書いたものである日記は、たしかにフィクションを前提としての物語とは違うが、しかし、作品化する意識、換言すれば対読者意識によって事実を歪曲したり、隠蔽したりすること、つまり虚構的要素が織り込まれるのも当然なことである。日記文芸中の虚構の要素と物語の虚構とを同一視するのは危険であるが、平安時代の日記の作者がどこまで物語文芸と日記を区別して執筆したかは、実は大きな問題であろう。

それは、おそらく作者以外誰も答えられないことであろう。しかしながら、作者が『蜻蛉日記』の身の上を書く日記という概念に牽引されていることも否定できない事実である。その意味で、あるいはその結果から見ても、やはり物語とは違うものだと認めざるを得ない。日記文芸の研究において、最も困難なのは、以上見てきたように作者の「虚構」の要素の度合であろう。

本日記の場合、作者は回想の中に自分の堀河天皇との世界を見事に構築したが、日記文芸の基本的な制約——作者の体験、あるいは自ら見聞した事実に基づく——のもとで、作者は苦悩に引き摺られたに違いない。作者が日記に描いた世界は、現実の世界とは大きく乖離し、他人からの非難も当然予想されたのである、本日記の末尾の章段に読者の諒解を求める姿勢がはっきりと示されているのは堀河天皇との恋愛関係は事実ではなく、作者の構築した虚構であったことを、自らさらけ出してしまったことになるのではなからうか。

注

(注1) 石原昭平氏「解説」(『平安朝日記Ⅱ』、有精堂、昭和53・11) 参照。

(注2) 今井源衛氏「讃岐典侍日記——平安女流日記研究の問題点とその整理——」(『解釈と鑑賞』、昭和36・2) 参照。

(注3) 拙稿「『讃岐典侍日記』に描かれた愛と死」(『日本文芸論叢』、昭和58・3) 参照。

(注4) 拙稿「『讃岐典侍日記』の対読者意識」(『日本語日本文学』、昭和58・12) 参照。

(注5) 増田繁夫氏「讃岐典侍日記主題——「忠誠」という人間関係——」(『大阪市立大学人文研究』、昭和60・12) 参照。

(注6) 宮崎莊平氏「平安女流日記文学の研究」(笠間書院、昭和52・4)、四二九～六六ページ参照。

(注7) 拙稿「『讃岐典侍日記』上下巻における『われ』の位相」(『日本文芸論叢』、昭和59・3) 参照。

(注8) 注(7)に同じ。

○本文の引用及び章段数、ページ数の表示は、石井文夫氏他校注・訳『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』(日本古典文学全集18、小学館、昭和54・4)に拠る。